

ある事態に先行する事態

—アラビア語チュニス方言の起動動詞 *bda:* の
アスペクト・モダリティ・談話にわたる用法¹—

熊切 拓

cyberbbn@gmail.com

キーワード: アラビア語方言 起動動詞 意味論 アスペクト モダリティ 談話標識

要旨

アラビア語チュニス方言において起動動詞《～し始める》として一般的に用いられる *bda:* の未完了形には、起動の意味では解釈できない用法がある。本稿では、このような *bda:* の未完了形が、それが述べる事態が、ある基準となる事態に対して、時間的あるいは認知的に先行していることをあらわす、と分析した。そこで、「起動の意味をあらわさない *bda:* の未完了形」を「先行事態表示の *bda:*」と呼び、そのアスペクト、モダリティ、談話にわたる用法を記述し、その根底に先行事態と基準事態の関係という共通した事態認識があることを示した。

1. 本稿の課題

アラビア語チュニス方言²（以下チュニス方言）の動詞 *bda:*³ は、《～し始める》という起動をあらわすものとしてはもっとも一般的な動詞であるが、その未完了形は起動の意味では解釈できない用法をもつ。

次の(1)における *bda:* の未完了形 *jibda:* は、訳に示したように起動の意味をあらわさない。そこで、この未完了形 *jibda:* がいかなる意味をあらわしているのかが、問題となる。

- | | | | | | |
|-----|----------------|----------------|---------------|-----------------|----------------|
| (1) | <i>jibda:</i> | <i>r'a:ʒil</i> | <i>jiʒri:</i> | <i>wra:-ja:</i> | <i>w-a:na:</i> |
| | 始める IMPF.3SG.M | 男 | 走る IMPF.3SG.M | ～の後-GEN.1SG | そして-私 |

¹ 本稿は、第159回日本言語学会大会（2019年11月、名古屋学院大学）における口頭発表「アラビア語チュニス方言の起動動詞が存在を表す用法について」（『日本言語学会第159回大会予稿集』p.124-130）を発展させたものである。発表において有益なコメントをくださった方々に感謝を申し上げたい。なお、本稿は科学研究費助成金（19K13183）による成果を含む。

² アラビア語（アフロアジア語族のセム語派）の現代アラビア語諸方言マグリブ方言のひとつ。子音29種（IPAに準ずる）。/b, m, f, θ, ð, t, tʰ, d, n, s, sʰ, z, r, rʰ, l, lʰ, ʃ, ʒ, k, g, x, ɣ, q, h, ʕ, h, w, j/. 母音は /i, a, u/ およびその長母音 /i:, a:, u:/ の6種。名詞のクラスは男性（M）・女性（F）に分かれ、単数（SG）と複数（PL）の区別がある。動詞は未完了形（IMPF）と完了形（PERF）と2つの活用の系列があり、人称・数（単数・複数）・性（ただし3人称単数のみ）によって活用する。

³ 慣習にのっとり動詞形の代表として3人称単数男性完了形を示す。

ba:ʃ na:quf

どうして 止まるIMPF.1SG

「私の後を走っている（＝追いかけている）男がいるのにどうして立ち止まれようか」

（不定名詞を関係節が修飾する場合には関係詞は現れないため、ここでは jɪʒri: wra:-ja: は不定名詞 rʰa:ʒil の修飾節となる。次節の (2) でも同様である）

本稿は、bda: の未完了形のこうした用法を取り上げ、これが、ある基準となる事態に対して、時間的あるいは認識的に先行している事態を述べると分析する。その上で、この用法をアスペクトに関わるもの、モダリティに関わるもの、談話に関わるものの3つに分類し、その根底に共通して上記の事態認識があることを述べる。

本稿の構成は次の通りである。本節では、本稿の課題を述べ、第2節では、先行研究をまとめ、さらに起動動詞としての bda: の用法を概観する。第3節では、事態の時間的・認識的先行性をあらわす bda: 未完了形の用法をアスペクト用法、モダリティ用法、談話用法の3種に分けて記述する。第4節で結論と課題を述べる。

2. 先行研究とbda:の用法

2.1. 先行研究

(1) のような例における bda: 未完了形は、以下の (2) のような存在文の θamma: 《～がある・いる》と並列的に捉えることもできる。

(2) θamma: rʰa:ʒil jɪʒri: wra:-ja: tawwa:

～がいる 男 走るIMPF.3SG.M ～の後-GEN.1SG 今

「今、私の後を追いかけている男がいる」

そのため、先行研究では bda: 未完了形は存在をあらわすと記述されてきた。チュニス方言の文法書、Singer (1984: 316) では、bda: は「ある、存在する（“sein, existeren”）」をあらわす6種の「存在の動詞（Verbe d’existence）」に加えられている⁴。

また、チュニス方言に近いタクルーナ方言の語彙集、Marçais and Guïga (1958-1961: 251-255) の bda: の項目でも、その14番目の意味 (p244) として「ある（“se trouver, être”）」と記されている。

しかしながら、Singer には、この動詞がいかなる意味で存在をあらわしているかの記述はなく、またそこに挙げられた15の例文に付された独訳からもそれをうかがうことはできない。同様に、Marçais and Guïga も8個の例文（および仏訳）を載せるが、具体的な意味記述はなく、bda: が「起動の意味を失い、論理的コピュラにまで意味が縮小している」と記すのみである。

⁴ 他の5種の動詞は、xɪʔaʒ 《出る》、tʰɪʔaʃ 《登る》、ðʰar 《～に見える》、ʒa: 《来る》、sʰbah 《なる》。

また、この bda: 未完了形が単に存在をあらわすとは考えにくい例がある。

- (3) il-qha:wi: zma:nit-ha: **jibda:** θamma: il-fda:wi:
 DEF-カフェPL 時代-GEN.3SG.F 始めるIMPF.3SG.M ~がある DEF-語り部
 「カフェは、その当時には、語り部がいたものだった」 [II-385]⁵

この (3) は存在文を作る副詞の θamma: の前に、bda: 未完了形が置かれたものである。θamma: が「~がある」という存在をあらわす以上、ここで jibda: を単に「~がある」という意味で解釈することはできない。また、後に見るように、bda: 未完了形に他の動詞が後続する例もあり、その場合は、bda: 未完了形を存在を表す要素として解釈するのは困難になる。

さらに、この bda: 未完了形 には、もうひとつ注目すべき用法が存在する。それは、なんらかの談話的機能を持った談話標識としての用法である。これについて Marçais and Guïga (1958-1961: 255) は、bda: の16番目の用法として、この動詞の未完了形3人称単数男性形が、「文頭に置かれて、後続する発話が、その前に述べられた事実の認識に基づいているということであらわす」と述べる。上の「存在をあらわす」用法と関連づけられているわけではないが、本稿では、この用法も、「存在をあらわす」用法と同じ枠組みで捉えられることを示す。

本稿では、こうした起動の意味をあらわさない bda: 未完了形の意味と用法を、談話標識としての用法をも含めて、記述することを試みたい。

2.2. 起動動詞としての bda:

本論に入る前に、bda: の起動動詞としての用法を確認する。この動詞はこの言語におけるもっとも一般的な起動動詞であり、通常は、未完了形動詞を後続させ、その動詞のあらわす動きが起動したことをあらわす⁶。

この動詞が起動の意味をもつのは、原則的に完了形で用いられた時のみである。完了形は文脈によってテンスが決まり、以下の (4a) の場合、過去とも現在とも解釈できる。いっぽう未完了形は (4b) のように通常は起動の意味では用いられない。

- (4)a. ifla: **bda:t** ts^hubb
 雨F 始めるPERF.3SG.F 降るIMPF.3SG.F
 「(過去のある時点、もしくは現在) 雨が降り始めた」

⁵ 本稿で資料として用いたのは、チュニス方言で書かれた『アル・アルウィー物語集』(Al-ʕArwi:, ʕAbd-al-ʕazi:z (1989) hika:ja:t al-ʕArwi: Vol. I-IV. 2nd ed. Tunis: Al-Da:r Al-Tu:nisi:ja li-l-Naʕr) の第1巻、第2巻である。引用した例文については訳文末の[] 内にローマ数字で巻数、アラビア数字でページ番号を記した。それ以外の例文は Farouk Herzi 氏 (40代男性) の協力による。

⁶ なお、文語アラビア語においても、bda: に対応する badaʔa が起動動詞として用いられる。

- b. *ifta: **tibda:** ts'ubb
 雨F 始めるIMPF.3SG.F 降るIMPF.3SG.F

ただし、未来における起動（(5)）、習慣的起動（(6)）をあらわす場合は未完了形になりうる。

- (5) tawwa: **nibda:** nōirr fi-r-rma:d fi-θ-θni:ja
 今 始めるIMPF.1SG 撒くIMPF.1SG ～を⁷-DEF-灰 ～の中-DEF-道
 「これから、私は道に灰を撒いていきます」[I-15]
- (6) kullma: nuxruʒ il-barra: iʃ-fta: **tibda:** ts'ubb
 ～たびに 出るIMPF.1SG ～に-外 DEF-雨 始めるIMPF.3SG.F 降るIMPF.3SG.F
 「私が外に出るたびに、雨が降り始める」

このような例外はあるものの、起動動詞としての bda: は完了形にほぼ限られる。これに対し、起動の意味をあらわさない bda: は常に未完了形である。

3. 事態の時間的・認識的先行性をあらわす bda: 未完了形

3.1. 起動の意味をあらわさない bda: 未完了形の意味

本稿では、起動の意味をあらわさない bda: 未完了形があらわすのは、単なる存在というよりも、「bda: 未完了形を含む文の述べる事態が、ある基準となる事態に対して、時間的あるいは認識的に先行していること」であると考ええる。

そこで、本稿ではこれ以降、こうした意味をあらわす bda: 未完了形を「先行事態表示の bda:」と呼ぶことにしたい。

ここで、冒頭に掲げた例 (1) を (2) との比較において検討する。(2) で述べられているのは「今、私の後を追いかけている男がいる」という1つの事態である。しかし、これに対して、(1) では、「私の後を追いかけている男がいる」と「どうして立ち止まれようか（と私が自問する）」という2つの事態が、関係づけられている。この2つの事態の関係は次のようになるう。

- (7) 基準となる事態（すなわち、「どうして立ち止まれようか（と私が自問する）」）に対して、その事態に先行して生じ、その事態が生じているときにも継続している事態（「私の後を追いかけている男がいる」という事態）

このように、先行事態表示の bda: は、この動詞を含む文の述べる事態が、ある基準となる事態に対してもつ関係をあらわす。そこで、以後、先行事態表示の bda: を含む文が述べる事態を

⁷ のちの例文 (19) にも現れるこの前置詞 fi:- は、目的語に接頭して進行・継続相を表すアスペクト標識である（熊切 2012）。

「先行事態」、そして先行事態の基準となる事態を「基準事態」と呼ぶことにする（なお、以下の例文においては、先行事態（precedent event）を [ᵖ]、基準事態（benchmark event）を [ᵇ] で示し、また、例文のグロスにおいては先行事態表示の bda: を「先行」と略す）。

先行事態表示の bda: は、事態の時間的関係を表すアスペクト用法、事態の認識的な関係をあらわすモダリティ用法、談話にかかわる談話用法の3つにわけることができる。そのそれぞれについて検討する。

3.2. アスペクト用法

(1) における先行事態と基準事態の関係をみると、そこにおいてあらわされているのは、基準事態の起きた時点で、先行事態が継続しているということである。すなわち、先行事態表示の bda: は、基準事態と先行事態とのアスペクト的な関係をあらわしているということができて、そこで、これを「先行事態表示の bda: のアスペクト用法」と名付けることにする。

このアスペクト的用法には、2つの種類が認められる。1つは、基準事態が談話内に明示される場合であり、もう1つは、先行事態を述べる文の発話自体が基準事態となる場合である。まず、前者の用法を見る。

3.2.1. 基準事態が談話内に明示される用法

この用法においては、先行事態表示の bda: があらわす事態の関係は次のようなものである。すなわち、bda: を含む文の述べる事態は、談話内に述べられるある基準となる事態に対して、それに先行して発生し、その基準事態の発生時においても継続している、という関係である。

次に具体的な用例を見る。

- (8) qa:lt-ilha: l-aʃru:sa ismaʃ tawwa: ki:-nu:sʃlu:
 言う PERF.3SG.F-DAT.3SG.F DEF-花嫁 聞く IMPR.2SG 今 ~とき-着く IMPF.1PL
 l-iz-za:wja w-na:xõu: bi:t w-[ᵖ nibda: a:na:
 ~に-DEF-聖者廟 そして-取る IMPF.1PL 部屋 そして-先行 IMPF.1SG 私
 w-umm-i: w-xwat-i:] [ᵇ ha:wka sa:ʃasa:ʃa i:ʒa:
 そして-母-GEN.1SG そして-姉 PL-GEN.1SG そちら 時々 来る IMPR.2SG
 w-qu:l-li: si:d-i: jʃajitʃ-lik]
 そして-言う IMPR-DAT.1SG 旦那-GEN.1SG 呼ぶ IMPF.3SG.M-DAT.2SG

「花嫁（主人）は彼女（召使い）に言った。『聞きなさい。これから私たちが聖者廟に着いて、部屋を借りて、私が母と姉たちといるそのあいだに、そのほうは、時々やってきては、旦那様があなた様をお呼びでございますと私に言うんだよ』」 [I-020]

この (8) において先行事態表示の bda: を含む文のあらわす先行事態は「私と母と姉たちがいる」というものである。この事態は、談話内において主人から召使いへの命令として明示され

る「やってきて、言う」という基準事態に対して、それに先行して発生し、その基準事態の発生時においても継続している。

(8) の例においては、基準事態は命令文として、先行事態と独立して明示されていたが、この基準事態は、先行事態を述べる文の内部の時の副詞としてあらわされる場合もある（前掲の例文(3)）。

- (9) il-qa:wi: [^bzma:nit-ha:] [^pjibda θamma: il-fda:wi:] (= (3))
 DEF-カフェPL 時代-GEN.3SG.F 先行IMPF.3SG.M 〜がある DEF-語り部
 「カフェは、その当時には、語り部がいたものだった」 [II-385]

(9) はある物語の語りにおいて述べられた文であるが、この文において、物語が語られていた時代（「その当時」）を基準として、それ以前から「カフェに語り部がいた」という先行事態が述べられている。

いっぽう、次の例では、先行事態と基準事態とが別々の人物によって語られている。

- (10) qa:l-ilha: [^bʕand-il-ʕasʕr talqa:-ni:
 言うPERF.3SG.M-DAT.3SG.F 〜のころ-DEF-アスル 見つけるIMPF.2SG-ACC.1SG
 fi:-ha-l-bqi:ʕa] qa:lit imma:la barra: gidd
 〜の中-この-DEF-場所 言うPERF.3SG.F ならば 行け 直すIMPR.2SG
 nafs-ik w-kassim ahwa:l-ik w-baddil
 自身-GEN.2SG そして-整えるIMPR.2SG 様子PL-GEN.2SG そして-変えるIMPR.2SG
 hwa:ja:t-ik ba:ʕ [^ptibda: ki:f-in-na:s]
 着物-GEN.2SG 〜ように 先行IMPF.2SG 〜のように-DEF-人々
 「彼は彼女に言った。『アスル（午後の礼拝の時間）のところに、お前は私をこの場所で
 見つけるだろう』 彼女は言った。『ならば、さあ行って、（そのころには）お前が人
 並みの身なりになっているように、きちんとし、身なりを整えて、着替えなさい』」
 [I-177]

ここでは、基準事態として談話内に明示されているのは、男が女に告げる「アスルのところに
 お前は私を見つかる＝女がアスルの頃に男に会いにやってくる」という事態である。そして、
 その次になされる女の発話では、この基準事態に対して、「男が人並みの身なりになる」とい
 う事態が先行して実現しているように要求されている。

このように、基準事態は、先行事態を述べる bda: の未完了形を含む文とは離れて現れること
 ができる。いいかえれば、先行事態を述べる文と基準事態を述べる文は、なんらかの文法的接
 続関係にあるのではなく、文脈において結びつけられているということになる。したがって、
 そのような文脈上の関係さえ明白であれば、基準事態は必ずしも文として明示されていなくて

も、これを基準として先行事態表示の *bda:* が現れうる。これが、次に示す、先行事態を述べる文の発話自体が基準事態となる用法である。

3.2.2. 先行事態を述べる文の発話自体が基準事態となる用法

この用法において描写されるのは、*bda:* があらわす先行事態について語り手が発見するという状況である。この場合、基準事態は、語り手の発見として先行事態を述べる発話自体である。

- (11) *qa:l-lu:* *ʃku:n-ik* *inti:* *ja:xi:* *ins* *wlla:* *ʒa:n*
 言う PERF.3SG.M-DAT.3SG.M 誰-GEN.2SG あなた いったい 人間 もしくは 精霊
qa:l-lu: *a:na: saʃd-ik* *a:h* *saʃd-i:*
 言う PERF.3SG.M-DAT.3SG.M 私 幸運-GEN.2SG ああ 幸運-GEN.1SG
 [ʰ *jibda:* *hu:wa* *saʃd-i:*]
 先行 IMPF.3SG.M 彼 幸運-GEN.1SG
 「彼は彼に言った。『お前は誰だ。人間か精霊か』 彼は彼に言った。『私はお前の幸運だ』 『ええ、俺の幸運だって。彼が俺の幸運だったのか』」 [I-345]

これは、男性の主人公が自分の幸福（を司る神秘的な男）を発見する場面である。このくだりにおいては、主人公の発見した事態が、先行事態表示の *bda:* を含む文による発話として述べられている。これは、発見という基準事態に対して、その発見以前から、この神秘的な男が主人公の幸福を司る存在であり続けたという点で、発見された事態が先行事態となっているからだと考えられる。

次の例は、女性主人公による「自分の夫に別の妻子がいた」という先行事態の発見を語るものであるが、ここでは基準事態となる発見そのものは、主人公の発話としてではなく、語りの一部として述べられている。

- (12) *daxlu:* *tilqa:* *mrʰa: ra:qda* *w-rʰa:ʒil* *ra:qid*
 入る PERF.3PL 見つける IMPF.3SG.F 女 寝る AP.SG.F そして-男 寝る AP.SG.M
fi:-ʒnab-ha: *a:h* *rʰa:ʒil-ha:* *rʰa:ʒil-ha:* *bʒu:d-u:*
 ～で-脇-GEN.3SG.F ああ 男-GEN.3SG.F 男-GEN.3SG.F 本人-GEN.3SG.M
rʰa:ʒil-ha: *si-l-aʃru:s* *illi:* *ma:-ʒitkallim-ʃi:*
 男-GEN.3SG.F 氏-DEF-花婿 REL NEG-話す IMPF.3SG.M-NEG
 [ʰ *jibda:* *ʃand-u:* *mrʰa: uxra:* *w-tʰufla* *w-wlid*]
 先行 IMPF.3SG.M ～にある-GEN.3SG.M 女 他の SG.F そして-娘 そして-息子
 「彼らは（部屋に）入った。彼女は女が寝ているのを見出した。そして男がその女の脇で寝ていた。ああ、彼女の夫ではないか。彼女の夫その人、彼女の夫、口をきかない花

婿殿だ。彼に別の女と娘と息子がいたのだ」[I-21]

3.2.3. アスペクト用法における文法的特徴

ここではアスペクト的用法における先行事態表示の *bda:* の文法的特徴についてまとめる。まず、*bda:* のとる人称について見ると、(8) から (12) までの例のうち、(8) が1人称単数形、(10) が2人称単数形であり、それ以外はすべて3人称単数形である。本研究で利用した資料においては、1人称と2人称が現れるのは、アスペクト用法のみであり、この点でモダリティ用法・談話用法と異なる。

また、先行事態表示の *bda:* に後続する要素においても特徴がある。談話用法においては、先行事態表示の *bda:* に動詞が後続する場合もあるが、アスペクト用法においては、動詞が後続する例はない。

3.3. モダリティ用法

アスペクト用法においては、先行事態表示の *bda:* を含む文の述べる事態の、基準事態に対する時間的先行性があらわされていた。この時間的先行性が、単に事態の発生の前後のみならず、事態の認識の前後という認識の次元にまで適用されると、先行事態表示の *bda:* は、事態の時間的先行性というよりも、事態の認識的先行性をあらわすようになる。この認識的先行性において、先行事態は、基準事態と、時間的關係ではなく、ある種の認識的關係を結ぶことになるが、この関係とは、具体的には、因果関係、もしくは一般性に対する非一般性という対比関係である。本稿では、こうした用法をモダリティ用法として、アスペクト用法と区別する。

このモダリティ用法では、基準事態に対する先行事態のもつ認識的關係は、上で述べたように2種に大別される。すなわち、基準事態の背景・理由となるものと、基準事態に対して一般的な状況を対比させるものである。

なお、モダリティ用法においては、先行事態表示の *bda:* が3人称単数形・複数形以外の人称形をとる例を見つけることはできなかった。

3.3.1. 先行事態が基準事態に対して背景・理由を述べる場合

犬が語る次の (13) では、「飼い主にお金がない」という先行事態が継続する中で、「飼い主も私（飼い犬）も食事をしない」という基準事態が発生したというアスペクト的な読みもできるが、そのいっぽう、「飼い主も私（飼い犬）も食事をしない」という事態の背景・理由として「飼い主にお金がない」という事態が存在するという読みも可能であり、モダリティ用法としても解釈できる。

- (13) *w-sa:ʕa:t* *jinsa:* *jbaʒjit-ni:* *bla:ʕʕa:*
 そして-時々 忘れる IMPF.3SG.M 夜を過ごさせる IMPF.3SG.M-ACC.1SG 〜なしで-夕食

w-sa:ʕa:t hu:wa bi:d-u: [ʰjɪbda:
 そして-ときどき 彼 自身-GEN.3SG.M 先行IMPF.3SG.M
 ma:-fi:ha:l-u:-ʃ] w-[ʰla: ja:kul la:
 NEG-お金を持っている-GEN.3SG.M-NEG そして-NEG 食べるIMPF.3SG.M NEG
 hu:wa la: a:na:]
 彼 NEG 私

「（飼い犬が飼い主について語る場面）そして、ときどき彼は忘れて私を夕食なしで夜を過ごさせる。そして時々、彼自身、お金がなくて、彼も私も食事をしない」 [I-438]

(14) は、先行事態表示の bda: が、理由を述べる接続詞 ʕla:xa:tʃir 《なぜなら》と共起している例である。

(14) jqu:lu: [ʰiʒ-ʒu:ʕ jxarriʒ ið-ði:b mi-l-ya:ba] ʕla:xa:tʃir
 言うIMPF.3PL DEF-飢え 出すIMPF.3SG.M DEF-狼 〜から-DEF-森 なぜなら
 ið-ði:b [ʰjɪbda: di:ma ha:rib l-il-ya:ba]
 DEF-狼 先行IMPF.3SG.M いつも 逃げるAP.SG.M 〜に-DEF-森

「飢えが狼を森から出す、と人々はいう。なぜかという、狼はいつも森に逃げ込んでいるからだ」 [II-176]

これは「飢えが狼を森から出す」ということわざについて述べた文である。このことわざは、「窮地に立たされた者は、そこから逃れるためにはえてして身を危険に晒しもする」という意味をあらわす。このことわざを理解するためには、狼というものが通常、森に隠れ暮らしている動物であり、飢えという窮地に直面しない限り、森の外に餌を探し行かないということ为背景として知っていなくてはならない。そのため、(14) においては、狼が「いつも森に逃げ込んでいる（＝いつも森に隠れている）」という事態が、このことわざの背景をなす先行事態として bda: を含む文によってあらわされている。

先行事態表示の bda: によって示される先行事態が、どうして理由や背景をあらわしうるのかであるが、これは、2つの事態が並べられた場合、先行するものが原因、その後のものが結果というように、因果関係として認識されるのがもっとも自然であるからであろう。

3.3.2. 先行事態が基準事態に対して一般的な状況を対比させる場合

ある事態が、他の事態よりも先行して認識されている場合、その事態は、他の事態よりも新奇性の点で劣る事態、いいかえれば、より普通の、より多くの人々に共有されている事態であるとも認識されうる。ここで、こうした「普通さ」を「一般性」と言い換えると、先行事態表示の bda: は、先行事態を基準事態よりも一般性のあるものとして述べる場合がある。

先行事態が基準事態に対して背景・理由を述べる場合には、アスペクト的な解釈も可能であったが、この用法では、そうした解釈は難しい。というのも、先行事態が基準事態よりも一般的であると述べるこの用法では、基準事態は、その一般的な状況に対する非一般的な事態をあらわし、先行事態と基準事態は、因果関係の順接的關係ではなく、「(先行事態)なのに(基準事態)」という逆接的關係によって結ばれることとなるからである⁸。

次の例では、先行事態表示の *bda:* が「女性たちは家にいる」ことを一般的な事態として述べ、これを「彼女は家にじっとしていなかった」という基準事態と対比させることで、チュニジアの一般的な慣習では「女性たちは家にいる」ものなのに、「彼女は家にじっとしていなかった」という事態を逆接的に述べている⁹。

- (15) *in-nsa:* *m'a:-hum* ^[p] *jibda:w* *fi-d-da:rʔ* *w-^[b]hi:ja*
 DEF-女性PL ~たものだ-ACC.3PL 先行IMPF.3PL ~の中-DEF-家 そして-彼女
ma:-tuqʃud-ʃ *fi-d-da:rʔ*]
 NEG-座るIMPF.3SG.F-NEG ~の中-DEF-家
 「女性たちは家にいるものなのに、彼女は家にじっとしていない」 [II-383]

(16) は、基準事態である命令（「別の国に変えよ」）が、譲歩をあらわす接続詞 *wlaw* 《たとえ〜でも》によって、先行事態（「その国の石が宝石である」）に連結されている。この2つの事態の関係は、「その国の石が宝石である」という誰にとっても好ましい状況の一般性に対する、「あなたに合わなければ国を変えよ」という個別的行動の非一般性としてあらわすことができる。

- (16) *i:ða:* *ma:-wa:tat-ik-ʃ* *bla:d* ^[b] *baddil*
 もし NEG-合うPERF.3SG.F-ACC.2SG-NEG 国SG.F. 変えるIMPR.2SG
b-uxt-ha:] *wlaw* ^[p] *jibda:* *hʒar-ha:* *zmurd*
 ~で-姉妹-GEN.3SG.F たとえ 先行IMPF.3SG.M 石-GEN.3SG.F エメラルド
w-ja:qu:t]
 そして-宝石
 「もし、ある国（女性名詞）があなたに合わなかったら、別の国（=その姉妹）に変えなさい。たとえその国の石がエメラルドと宝石であっても」 [I-302]

⁸ この逆接的關係は前掲の (14) にもわずかに読み取ることができる。すなわち、「狼はいつも森にいるものなのに、空腹になると森を出ざるをえない」。

⁹ (15) のような、主題をもつ文が接続詞 *w-* によって連結される構文（「主題化重文構文」）については、熊切 (2019) を参照されたい。

ただし、ここでいう「一般性」と「非一般性」の対立は、相対的なものであることに留意が必要である。先行事態として「彼に明白な正当性がある」、そして基準事態として「その正当性を認める者がいない」という2つの事態を述べる次の例を見てみよう。

- (17) w-miski:n il-maðʕlu:m ki:f [ʰjibda: haqq-u:
 そして-哀れなSG.M DEF-不正をなされた者 ～とき 先行IMPF.3SG.M 真実-GEN.3SG.M
 ba:jin] w-[ʰla: min mustaʕrif bi:-h]
 明白なSG.M そして-NEG REL 承認するAP.SG.M ～に-GEN.3SG.M
 「そして、悲しいことに、不正に扱われた人は、彼に明白な正当性があるのに、誰も彼
 を認めてくれないものなのだ」 [I-156]

一見すると、彼以外の人々について述べる「その正当性を認める者がいない」のほうが一般的であり、彼個人について述べる先行事態のほうが、個別的、つまり非一般的であるように見える。しかしながら、この文が現れる文脈を検討すると、その逆であることがわかる。すなわち、この文は、自分の稼ぎを奪われた貧しい女性が、そのことを訴えても誰も理解してくれないどころか、周囲の人々に逆に泥棒扱いされる、という文脈で、語り手がその女性の心境を説明するために語った文である。この女性は物語の主人公であり、したがって語り手、そして聞き手の視点は、その女性に置かれている。それゆえ、その女性の状況に該当する「彼に明白な正当性がある」という事態は、語り手と聞き手の間ですでに共有されている認識である。そのため、語り手と聞き手の間では、一般性のある先行事態として述べられるのである。

このように事態の先行性の決定について、語り手と聞き手の共通理解が関与していることから、この先行事態表示の bda: のもつ談話的な性質も読み取ることができよう。次節ではこの点について論ずる。

3.4. 談話における用法

先行事態表示の bda: は、談話においては想起をあらわす。この場合、想起される内容が先行事態となり、基準事態となるのは「想起する」という事態そのものである。この点では、3.2.2. で扱った発見の用法と似た事態認識となる。

談話における用法には2種のものがある。ひとつは、事態の想起をあらわす用法であり、もうひとつは談話的事態の想起を喚起する用法である。後者の用法においては、先行事態表示の bda: は談話標識化し、常に文頭のみに現れ、また、3人称単数男性形、すなわち jibda: しか現れない。また、この談話用法では、アスペクト用法・モダリティ用法とは異なり、先行事態表示の bda: の後に動詞が現れる。

3.4.1. 事態の想起をあらわす用法

この用法においては、先行事態表示の *bda:* は、語り手や聞き手が記憶している事態を先行事態とし、その記憶された事態を想起するという事態そのものを基準事態として述べる。その想起のありようについて言えば、「不意に思い出す」予期せぬ想起ではなく、語り手が、自らの記憶を探索して、状況に適合したものを探り出したり、聞き手に思い当たらせるといったものであるようだ。次の (18) では、語り手は記憶を整理しつつ思い当たるものを先行事態表示の *bda:* で列挙している。

- (18) *ki:fma:* *ka:nit* *ilju:m* *j3i:* *θla:θi:n* *sna:* *fi-n-nfi:ð'a* *ummik* *sa:lma*
 ～のように ～だった 今日 およそ 30 年 ～で-DEF-地名 人名 人名
il-hamma:mi:ja [^b *tibda:* *qa:ʕda* *fi:-qahwa* *la:ʒrja:n* *hi:ja*
 人名 先行IMPF.3SG.F 座るAP.SG.F ～で-カフェ 固有名詞 彼女
w-r-r3a:l *tahki:* *w-ta:xuð* *kilma*
 そして-DEF-男PL 話すIMPF.3SG.F そして-取るIMPF.3SG.F 言葉
w-taʕʕi: *kilma*]] *w-ki:f* *ʃi:ru:ba* *fi:-3amma:l* *illi:*
 そして-与えるIMPF.3SG.F 言葉 そして-～のように 人名 ～で-地名 REL
 [^b [^b *tibda:* *tdu:r* *fi-f-ja:riʕ* *w-tuqʕud*
 先行IMPF.3SG.F 回るIMPF.3SG.F ～で-DEF-大通り そして-座るIMPF.3SG.F
fi-l-qahwa *mʕa-r-r3a:l* *w-titkallim* *ja:sir*]]
 ～で-DEF-カフェ ～と-DEF-男PL そして-話すIMPF.3SG.F たくさん
 「(話題の女性は) 今から30年ほど前にエンフィーザにいたウンムック・サールマ・イル・ハンマミーヤ(という女性)みたいで、その女性はといえば、カフェ・ラージュリヤーンに男たちと座って、ああ言えばこう言うというようなお喋りをしていたものでした。また、ジャンメールのシールーバ(という女性)みたいでもありまして、その女性は大通りを歩き回り、男たちと一緒にカフェに座って、大いに話したものでした」[II-384]

次の例は、語り手ではなく聞き手の想起に関わるものである。

- (19) *ha:k-il-ʕarbi:ja* *lli:* *lqi:t-ha:* *thizz*
 あ-DEF-田舎の女性 REL 見つけるPERF.2SG-ACC.3SG.F 取るIMPF.3SG.F
fi-l-hʕab *w-tʕaʒijh* *bi:-h* *ha:ða:ka* *bnɑ:dim*
 ～を¹⁰-DEF-薪 そして-落とすIMPF.3SG.F ～で-GEN.3SG.M あれ 人間
fi:-ha-l-waqt *w-hizma* *il-hʕab* *hi:ja* *ð-ðnu:b* *mta:ʕ-u:* (...)
 ～の中-この-DEF-時 そして-束 DEF-薪 それ DEF-罪PL ～の-GEN.3SG.M

¹⁰ この前置詞 *fi:-* については脚注7を参照されたい。

^b [^p jibda:	jzi:d	ʕli:-ha:	
先行IMPF.3SG.M	増やすIMPF.3SG.M	～について-GEN.3SG.F	
w-jigri:	w-jqu:l	ja:-qillat	s'ahha]]
そして-走るIMPF.3SG.M	そして-言うIMPF.3SG.M	～よ-少なさ	元気
「お前が出会ったあの田舎の女性は、（抱え切れないほどの）薪を持ち上げようとして（かえってそのために）薪を落としていたが、あれは現代の人間（の姿）だ。そして薪の束は、人間の罪なのだ。（中略）人間は罪を増やしては走り回って『元気が足りない（＝もっと増やそう）』と言っている」 [II-48]			

これは、天の使いが、主人公に、田舎の女性が大量の薪を背負おうとして落としている場面を見せたのちに、それが現在の人間の姿をあらわしたものであると解き明かす場面である。ここでは、お前もそうした人間の貪欲なさまに思い当たるだろうと、天の使いが、jibda: を用いて、聞き手である男に対して想起を促している。

3.4.2. 談話的事態の想起を喚起する談話標識 jibda: の用法

先行事態表示の bda: は、語りにおいて、話が脇道に逸れたり、中断したりしたさいに、聞き手を元の文脈に戻す時にも現れる。ただし、この用法の場合、未完了形3人称単数男性形 jibda: のみが用いられ、また常に文頭に置かれる。本稿では、こうした不変化かつ出現環境の決まっている jibda: を談話標識と捉え、これが、「語った」という別の談話的事態を先行事態とし、この先行事態について聞き手の想起を喚起するという談話的事態を基準事態とするという点で、これまで述べてきた先行事態表示の bda: と同じ事態認識をあらわすと分析する。

次の (20) は語りがいったん中断し、再開されたときに発せられた文の文頭に jibda: が現れた例であり、談話標識の jibda: の用法としては典型的なものである。

(20) ^b [^p jibda:	ja:si:di:	qulna:	darbkit
先行IMPF.3SG.M	みなさん ¹¹	言う PERF.1PL	太鼓を叩く PERF.3SG.F
w-yanna:t	w-hu:wa	jitʕaʃja:	ʕa:mil
そして-歌う PERF.3SG.F	そして-彼	夕食を食べる IMPF.3SG.M	する APSG.M
ki:f]] za:	waqt-in-nu:m	qa:m	tmadd
楽しみ 来る PERF.3SG.M	時-DEF-眠り 立つ PERF.3SG.M	横になる PERF.3SG.M	
ʕa-l-bank	ki:f-ʕa:dt-u:	w-hi:ja	t'alʕit
～の上に-DEF-長椅子	ように-習慣-GEN.3SG.M	そして-彼女	上る PERF.3SG.F
l-il-farj			
～に-DEF-寝台			

¹¹ 「みなさん」というグロスをつけた ja:si:di: は、文字通りには「我が主人よ」という意味になるが、ここでは談話標識として機能している。ただし、その機能の詳細についてはまだわからない。

「さてみなさん、彼女が太鼓を叩き、歌い、彼のほうは大いに楽しんで夕食を食べたとすでに申し上げましたが、寝る時間が参りますと、彼は立ち上がって、いつものように長椅子に横になり、彼女は寝台に上がったのでした」[I-014]

本稿で論じる先行事態・基準事態という観点からこの (20) は次のように整理できる。

- (21) ① 語り手は、「彼女が太鼓を叩き、歌い、彼のほうは大いに楽しんで夕食を食べた」ということを語る。（「語った」という談話的事態＝先行事態）
- ② 語りを中断する。
- ③ 語りの再開にあたり、(20) jibda: 以下の文で、「彼女が太鼓を叩き、歌い、彼のほうは大いに楽しんで夕食を食べた」と、先行事態を繰り返す。そのことにより、聞き手の想起を喚起する。（聞き手の想起を喚起するという談話的事態＝基準事態）
- ④ その夕食以後のできごと（(20) 3a: 以下）という新たなできごとについて語り出す。

すなわち、(20) においては、すでに語られたということが先行事態、そして、この先行事態が jibda: 以下で繰り返されて、聞き手の想起を喚起するということが基準事態となっていると分析することができる。したがって、この談話標識としての jibda: もまた、先行事態表示の bda: と同様に、先行事態と基準事態の事態関係認識をあらわしているといえよう。なお、こうした解釈は、Marçais and Guíga (1958-1961: 255) がこの談話標識の jibda: について「文頭に置かれて、後続する発話が、その前に述べられた事実の認識に基づいているということをあらわす」とした見方とも一致する。

3.5. 先行事態表示の bda: の用法のまとめ

ここで、本節で述べた先行事態表示の bda: の用法をまとめると、以下のようになろう。

(22) 先行事態表示の bda: の未完了形の用法の全体像

I. アスペクト用法 (3.2.)

- i. 基準事態が談話内に明示される用法 (3.2.1.)
- ii. 先行事態を述べる文の発話自体が基準事態となる用法 (3.2.2.)

II. モダリティ用法 (3.3.)

- i. 先行事態が基準事態に対して背景・理由を述べる場合 (3.3.1.)
- ii. 先行事態が基準事態に対して一般的な状況を対比させる場合 (3.3.2.)

III. 談話における用法 (3.4.)

- i. 事態の想起をあらわす用法 (3.4.1.)
- ii. 談話的事態の想起を喚起する談話標識 jibda: の用法 (3.4.2.)

これらの用法はこれまで見てきたように、すべて、ある基準事態に対して、先行事態表示の bda: が先行事態を述べるという共通した事態認識をあらわしている。それゆえ、先行研究 (Singer 1984: 316、Marçais and Guïga 1958-1961: 244) のように、この bda: を単なる存在動詞として解釈しては、この動詞があらわす事態認識を看過することとなろう。

4. 結論と課題

本稿では、起動の意味をあらわさない bda: 未完了形の用法を、「先行事態表示の bda:」と名付け、これを含む文が、ある基準事態に対して、「先行して発生し、その基準事態の発生時にも継続している先行事態」を述べると捉えた。そしてこの観点から、この用法を、アスペクト用法、モダリティ用法、談話における用法に大別し、それぞれの用例を検討した。その結果、いずれの用法も、先行事態と基準事態の関係という共通した事態認識において捉えることができた。

しかしながら、この3種の用法には違いも見られる。ひとつは、先行事態表示の bda: の人称である。「III-ii. 談話的事態の想起を喚起する談話標識 jibda: の用法」においては、3人称単数男性形しか現れないが、「II. モダリティ用法」、および「III-i. 事態の想起をあらわす用法」においても、3人称単数男性・女性、3人称複数、というように3人称の例しかない（3人称単数女性 は (18)、3人称複数 は (15)）。これに対して、「I. アスペクト用法」においては、(8) の1人称、(10) の2人称がある。したがって、人称の制限という点からみると、制限の弱いアスペクト用法 (I.) と、3人称単数男性形しか現れないという点で制限の強い談話標識用法 (III. ii.) との両極端があり、その中間にモダリティ用法 (II.) と「III-i. 事態の想起をあらわす用法」があると考えられる。

この言語においては、何らかの動詞や人称辞が文法化した場合、その形式はほとんどつねに3人称単数男性形となる。それゆえ、ここで、先行事態表示の bda: の未完了形の用法を、「I. アスペクト用法」、「II. モダリティ用法、III-i. 事態の想起をあらわす用法」、そして談話標識用法 (III. ii.) という3つに分けて捉えるならば、動詞人称の制限の強化という点で、アスペクト用法から談話標識へといたるまでの文法化の過程を想定することができる。

また、先行事態表示の bda: の現れる環境にも違いがある。アスペクト用法とモダリティ用法においては、bda: には動詞が後続しない。いつぼう、談話用法では、動詞が後続しうる。さらに、同じ談話用法でも、「III. i. 事態の想起をあらわす用法」の場合、先行事態表示の bda: に後続する動詞は未完了形 ((18) の2番目の tdu:r と (19) の jzi:d) だが、談話標識用法 (III. ii.) の (20) では、yibda: ともうひとつの談話標識 (ja:si:di:) の後に完了形 (qulna:) が現れている。こうした違いもまた、文法化の過程と関連付けて解釈できるかもしれない。いずれにせよ、アスペクト用法、モダリティ用法、談話用法の違いを文法化と結びつけるこの想定については、他言語の談話標識の文法化過程をも考慮に入れつつ検討することを今後の課題としたい。

また、もうひとつ重要な課題に、起動動詞としての bda: と先行事態表示の bda: との関係がある。どうして起動動詞である bda: が、ある事態を、別の事態に対して先行している事態として

提示できるのか、という問題について考察することは、この言語における起動、そして完了・未完了アスペクトについて、より深い理解をもたらすものと考えられる。

略号

1, 2, 3:	1人称, 2人称, 3人称	IMPR:	命令形
-:	形態素境界	M:	男性
ACC:	対格人称接尾辞	NEG:	否定辞もしくは否定に関与する要素
AP:	能動分詞	PERF:	完了形
DAT:	与格人称接尾辞	PL:	複数
DEF:	定冠詞	REL:	関係詞
F:	女性	SG:	単数
GEN:	属格人称接尾辞	先行:	先行事態表示の bda:
IMPF:	未完了形		

参考文献

- 熊切拓 (2012) 「アラビア語チュニス方言のアスペクトを表示する前置詞：その統語的特徴と意味」『東京大学言語学論集』32. 37-65.
- 熊切拓 (2019) 「アラビア語チュニス方言において主題をもつ文の並列が意味するもの」『東京大学言語学論集』41. 155-179
- Marçais, William and Abderrahmân Guîga (1958-1961) *Textes arabes de Takrouîna. II. Glossaire*. Paris: Bibliothèque de L'École des Langues Orientales Vivantes.
- Singer, H-R. (1984) *Grammatik der Arabischen Mundart der Medina von Tunis*. Berlin/New York: Walter de Gruyter.

An Event Precedent to Another: The Aspectual, Modal, and Discourse Usages of the Inchoative Verb *bda:* in Tunis Arabic

KUMAKIRI Taku

Keywords: Arabic dialects, inchoative verb, semantics, aspect, modality, discourse marker

Abstract

The verb “*bda:*” (to begin) is widely used as inchoative in Tunis Arabic but it has a peculiar employment only when in the imperfect form, which rejects an inchoative reading. This paper claims that this employment of the imperfect *bda:* indicates an event that is temporally and cognitively precedent to another event. In this case, the latter is seen as a benchmark event. Examining the date of this *bda:*, which denotes a preceding event, the paper identifies three usages: aspectual, modal, and discourse. It is emphasized in the paper that all three usages are explained in terms of the relationship between a precedent event and a benchmark event.

(くまきり・たく)